

会議名	日本畜産環境学会
開催日時	2007年8月2日～3日
開催場所	高山市市民文化会館
主催者	日本畜産環境学会
参加人数(概数)	約80名
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>日本畜産環境学会は、平成13年に日本畜産環境研究会(平成5年発足)から改組された比較的新しい学会である。今大会は会員間の情報交換を十分に行うために2日の日程で、シンポジウム形式による2題の特別講演、14題の一般発表、8題のポスター発表があった。ディスカッションの時間も長めに設定されており、議論も活発であった。また、参加者相互の交流、情報交換の場として設定された懇親会も約40名の参加があり、盛会であった。</p> <p>特別講演 「生物系廃棄物のコンポスト化技術とバイオマスプラスチックの動向」と題して北海道大学大学院農学研究院 木村俊範氏から話題提供があった。演者は実験室内コンポスト実験装置を用いた基礎研究から、盛岡・紫波地区の生ゴミコンポスト工場の開発まで長年にわたって幅広くコンポスト研究を手がけてきた経歴を持つが、生物系廃棄物のコンポスト化技術の紹介は実験室規模の小型コンポスト化装置を用いたものであり、実用化にどのように結び付けてきたかについては、報告がなかった。バイオマスプラスチックについては、国内の資源有効利用の観点からワンウェイ的な生分解性プラスチックよりは「カーボンニュートラル」なバイオマス由来のプラスチックのほうが環境にやさしいが、価格および用途拡大の面で技術開発が必要であるとの報告があった。</p> <p>続いて「コンポスト化過程の微生物の動態とコンポスト利用における環境影響」と題して名古屋大学エコトピア科学研究所 片山新太氏から話題提供があった。演者は牛ふんのコンポスト化反応における微生物群集構造の変化の中で、微生物バイオマスの変化がコンポスト化の反応率(減量化率)と相関関係にあること、原料によって微生物群集構造が異なること、牛ふんコンポストを利用した農耕地における土壌微生物群集の動態、作物生産量の改善と、窒素過多による硝酸溶脱と家畜排泄物に含まれる有害化学物質の問題に関する話題提供があった。特に1987年に開設した名古屋大学の有機物連用圃場での作土層の変化については、コンポストを施用した区では、土壌の水はけが下層土まで大きく改善されていることが土壌断面の写真等で大変わかりやすく説明がなされた。</p> <p>一般発表 脱臭関係が14題中3題あり、問題の大きさを示していた。演題は、汚水の脱窒技術、対比の施用可能量の設計システム(パソコン用プログラム)開発、実規模のバイオガスプラントの運転実績等多岐にわたり、また演者の専門分野も幅広く、畜産環境問題の解決には、従来の学問分野を横断的に結び付ける必要があることが感じられた。中には、コンポストからの細菌の分離の課題もあったが、これはかなり以前に検討された課題であり、分離が困難である上に分離した細菌をコンポストに添加しても効果が見られなかった報告が多い。何らかの発想転換が必要である。</p> <p>ポスター発表 微生物関係が8題中4題あった。このほか広島県庄原市における地下水の高濃度硝酸性窒素汚染地域の実態調査報告があり、このような汚染マップは地味な研究ではあるが、最も基盤的な研究であり、今後、調査地域の拡大、できれば全国ネットによる情報交換が必要な課題と思われた。</p>

<p>2 .今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>広島県庄原市における地下水の高濃度硝酸性窒素汚染地域の実態調査報告のような地味な研究ではあるが、最も基盤的な研究蓄積が不足しているように思われる。今後、調査地域の拡大、できれば全国ネットによる情報交換が必要な課題と思われた。</p> <p>コンポストからの微生物の分離、増殖、添加によるコンポスト化の促進という流れの研究は過去にも数多く行われたが、明確な効果はみられていない。このようなネガティブな成果は大変貴重であり、本学会等で取りまとめる必要があると思われる。</p>
<p>3 .その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>特になし。</p>
<p>4 .今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>畜産による環境汚染は深刻な問題であり環境関係の研究課題の応募も多いと思われる。</p> <p>本学会は畜産環境問題の認識、畜産環境保全に関する研究の基礎的および応用面の理解、畜産環境研究者の交流や他分野からの研究者の参入などを目標に活動してきたが、現実的には化学系および微生物系の研究者が多くを占めており、これは本学会に限らず全国的な傾向と思われる。</p> <p>しかし、畜産環境問題の解決には分野を越えた研究成果の結集が要求されており、特に、施設工学や IT 関連の研究者の参画した課題を実施することが重要である。</p>
<p>5 . 会議の所感</p>	<p>今回の大会では、学会理事長である中井 裕東北大学教授の研究グループが大会運営、一般発表などに活躍していた。独立行政法人研究機関および公立試験研究機関が多くの成果を発表していたが、他大学の参加が少なく、9月に開催される畜産学会岡山大会との関連もあると思うが研究者の層の薄さを感じられた。特に現場技術につながる研究が少なかった。</p>
<p>報告者</p>	<p>伊藤 稔</p>